

恐怖に満ちた世界への希望



恐怖に満ちた世界への希望

人類が地球上に存在してきた数世紀の間に、戦争によって何億人もの人々が早すぎる死を遂げてきました。その数は、ある推計では10億人に達するとも言われています。多くの場合、こうした戦争の終結時には、ある国による他国への侵略が二度と繰り返されず、世界から恐怖が完全に消え去ることを人々は願ってきました。

実際、国家間のこうした紛争の目的が公表される際、その一つとして「恐怖からの解放」が掲げられることがよくあります。

これは高潔な目標のように思えるかもしれないが、戦争が終結すると、関係者のほぼ全員の心は、未来に対するさらに大きな恐怖で満たされてしまうのがほぼ避けられない。ほぼすべての戦争の後、国家間の対立を解決できなかったことが、遅かれ早かれさらなる紛争を招き、恐怖を減少させるどころか増大させてきた。これこそが人類の歴史の物語である。

今日の世界における恐怖は、利己心や憎悪によって引き起こされた問題に対して、人間の指導者たちが実行可能な解決策を見出せなかったことに深く根ざしている。かつて、この世の賢者たちは人々に、人類は進化の過程を通じてより高い文明の状態へと着

実に進歩しており、恐怖はまもなく過去のものになると語っていた。

「世界は良くなりつつある」と彼らは語り、「まもなく、預言者たちの夢であり、詩人たちの歌でもあった、平和と善意に満ちたユートピアが実現するだろう」と続けた。

この明るい未来展望が正当であることを証明するものとして、教育の進歩が挙げられ、啓蒙された世界であれば、戦争によって国際紛争を解決しようなどとは考えないはずだと説かれた。

また、科学の飛躍的な進歩にも目を向けるよう求められ、これらもまた国家間の永続的な平和に寄与するだろうとされた。さらに、宗教が地球上で急速に勢力を拡大しており、まもなく全世界がイエスの「山上の説教」の哲学に深く染まり、戦争は不可能になるだろうと主張された。悲しいことに、これらすべて、そして他にも数多くなされた主張が、いかに惨めなほどに失敗に終わったか、私たちは痛感している。

恐怖に満ちた世界

しかし、戦争への恐怖は、今日の世界において人々の心に不安を植え付ける多くの要因のうちの、ほんの一部に過ぎない。新千年紀に入って四半世紀が経過しようとしている今、他にも多くの恐怖が個人、社会、そして国家を悩ませている。以下に、そうした恐怖の一部を挙げておく：

恐怖に満ちた世界への希望

特にいわゆる「西側世界」において、国内の政治的分断や二極化に伴う恐怖。これは多くの国々で動乱や暴力を引き起こしている。

中東から絶え間なく噴出しているように見える紛争や混乱、そしてそれが世界全体に及ぼしうる影響に対する恐怖。

経済面をはじめ多方面で密接に結びついている世界の超大国——中国、ロシア、米国——間の関係が、さらに悪化するのではないかという恐れ。

人工知能（AI）の継続的な発展がもたらす、まだ未知の影響への恐怖、そして人類がその進歩と利用を安全に制御できるかどうかへの懸念。

世界の超大国に比べれば小規模ではあるものの、抑制されなければ社会の重要な分野に甚大な被害をもたらしかねない、小規模な無法国家、政府、指導者たちへの恐怖。

地域、国家、そして世界レベルで、絶え間なく続くように見える金融・経済の不確実性に対する、一般的な懸念。

気候変動の影響の拡大、特に壊滅的な暴風雨、火災、地震といったより強力な自然災害の発生可能性や、前例のない気象パターンの変化といった影響に対する懸念。

近年、新型コロナウイルスのパンデミックとその世界への壊滅的な影響によって目撃されたような、予期せぬ感染症への恐怖。

道徳、人種、宗教、その他の分野を問わず、「文化戦争」が激化し続け、社会全体がこれほどまでに分断・分裂し、方向性を失ってまもなく自滅してしまうのではないかという恐怖。

最後に、これらすべての側面において、問題の兆候があらゆる方向でこれほどの規模で増大し続け、人類の究極的な生存さえも危ぶまれるのではないかという恐れがある。これが、恐怖に満ちた今日の世界の実情である。そこで我々は問う。この世界の回復と、人々の心からの恐怖の排除に向けた真の希望は存在するのだろうか？

預言に描かれた現代

現在の恐怖と苦難の状況は、絶えず進歩を遂げているという文明の主張にもかかわらず、世界中の多くの人々にとって予期せぬものとして襲いかかってきたが、聖書を注意深く研究する者たちにとっては驚きではなかった。なぜなら、聖書の至る所で、神に靈感を受けた預言者たちがこれを予言していたからである。例えば、ダニエル書では、人類の歴史におけるまさにこの時代を予言し、それを「国が立ってから今に至るまで、かつてなかったような苦難の時代」と描写した。

（ダニエル書12:1）。イエスはこのダニエルの預言

恐怖に満ちた世界への希望

を引用し、その成就是ご自身の再臨の時、すなわち世の終わりにあると説明されました。

イエスは、この苦難の時代の詳細の一部を概説し、地上には「諸国民の間に動揺と困惑」が生じ、人々は地上に降りかかる事柄を予見して恐怖のあまり心が挫けるだろうと述べました。（ルカによる福音書21:25,26）。

人々の心を満たす恐怖についてイエスが言及されたことは、彼が現代を指していたことを十分に示している。なぜなら、

今日ほど人々の間にこれほど広範な恐怖が蔓延したことはかつてなかったからである。イエスが、地上に「諸国の動揺と困惑」が生じると言われたとき、彼はそれを海の轟きと波に例えて説明された。

これは、かつて世界を平和と善意へと導く能力を誇っていた科学や技術そのものによって推進される、押し寄せる人間の利己主義の波がもたらすと恐れる大混乱を、絶望的に回避しようと奮闘する、今日の落ち着きなく不満を抱えた大衆を、実に的確に象徴している。

預言者ダビデもまた、私たちが生きているこの時代を予言しました。そして、イエスと同様に、彼もまた、かつては難攻不落と見なされていた文明の防壁に対して、人々や国家の騒々しい要求が襲いかかる中、世界の混沌を、海と波の容赦ない打ち寄せに例えました。

ダビデの預言は、神の御言葉に信仰を置く者たちに

向けられたものであり、彼はその者たちについて次のように宣言している。「それゆえ、たとえ地が揺れ動いても、山々が海の真ん中に投げ込まれても、たとえその水が轟き、荒れ狂っても、そのうねりによって山々が揺れ動いても、私たちは恐れない。」詩編46篇2、3節

「私たちは恐れない」と預言者は宣言しています。クリスチャンとして、私たちは地上に降りかかろうとしていることを恐れる必要はありません。つまり、聖書の預言をよく理解し、今日と明日について預言が告げていることに信仰を持てば、恐れることはないのです。

聖書の預言には、現在の世界の苦難の原因に関する唯一の真の説明が含まれており、は、この現在の恐怖に満ちた暗い時代の結末について、唯一の希望に満ちた展望を与えてくれます。人間の運命に関する神の計画を知ることは、私たちを取り巻く恐怖にもかかわらず、自らの心に平安と喜びを持ち、他の人々に慰めの確信を放つことができるようになることです。

聖書によれば、この恐怖と苦難に満ちた悲劇的な時代の結末はどうなるのでしょうか。「現代は運命との邂逅の時である」と言われています。これは正しいのですが、神はその運命を支配しておられ、その意味するところは極めて広範なものであり、それを把握しようとする、想像力をはるかに超えてしまい、ほとんど圧倒されてしまいます。簡潔に言えば、神の御言葉が指摘する事実は以下の通りです。

恐怖に満ちた世界への希望

私たちは、神の計画における一つの時代の終わりに差し掛かっています。いや、それ以上に、私たちは世界の終わりに差し掛かっているのです。それは、かつて多くの人が誤って想定していたような「地の終わり」（伝道の書

1:4）ではなく、サタンによる地上の支配の終わりであり、その支配はキリストの支配に取って代わられるのです。

私たちは今、キリストの再臨の時、そしてキリストの御国の確立に向けた準備の時代に生きています。

キリストの臨在のしるし

イエスが、人々の心が恐れに満たされる時代になると宣言し、私たちの時代の特徴を予言されたのは、弟子たちから尋ねられた質問への答えとしてでした。その質問とは、「あなたの来臨と世の終わりのしるしは何でしょうか」というものでした。

（マタイによる福音書24:3）。これらの質問を引用するにあたり、私たちは使用されたギリシャ語のという語句の正しい訳を採用しました。聖書のいくつかの翻訳では、この箇所が「あなたの来臨と、世界の終わりのしるしは何でしょうか」と誤訳されています。しかし、弟子たちが尋ねていたのは、イエスの再臨が近づいたことをどうすれば分かるかということではなく、むしろ、イエスが実際に再臨されたことをどうすれば分かるかということでした。

これらの問いに対する主の答えは、現在の世界の状況に関する唯一信頼できる説明であり、来るべきよ

り良い日々への唯一の真の希望を与えてくれます。それは、私たちが現在の時代の終わりに近づいており、イエスの「再臨」の時代に生きていることを明らかにしています。これはひいて、神の御言葉にある多くの約束が成就する時が近づいていることを意味します。それらの約束は、王の王、主の主であるキリストによる千年の統治の結果として、人類に与えられる平和と喜びと命の祝福について語っているのです。

これは、イエスが人間として地上に君臨することを意味するものではありません。イエスが初めて地上に来られたのは人間としての姿であり、ご自身が説明されたように、世のいのちのために、ご自身の肉体を死によって捧げるためでした。

（ヨハネによる福音書6:51）。しかし、カルバリの十字架上で御自身の人間性を犠牲にすることによって、死からの解放の道を備えられた後、彼は「だれも見ることがなく、また見ることもできない」創造主ご自身と同じ性質を持つ、栄光に満ちた神聖な存在として、死者の中からよみがえられました。（テモテへの手紙第一6:16）

神の御言葉にあるいくつかの預言をあまりにも文字通りに解釈した結果、キリストの再臨について極めて粗雑な概念が形成されてきた。ある人々は、キリストが再臨する際、

空中に浮かぶ人間の姿として現れ、同時に天と地において、核兵器の使用によってさえ人類がこれまで

恐怖に満ちた世界への希望

に成し遂げたことなど比べ物にならないほどの破壊力を伴う、凄まじい自然の激変が起こると想定してきた。

しかし今、私たちは、キリストの再臨に関するこの誤った概念の根拠とされてきた預言が、私たちの文明を形成してきた人為的な制度の激変を象徴的に描写していることに気づきます。預言が「世の終わり」として描いているのは、まさにこのことであり、地球の終わりではなく、使徒パウロが「この悪の世」と表現しているものです。（ガラテヤ人への手紙 1:4）。イエスはサタン、すなわち悪魔を「この世の君」と呼ばれました。したがって、「世の終わり」とは、サタンの帝国の終焉、すなわち人間の心と精神に対するサタンの支配の終焉を意味します。ヨハネによる福音書 12:31

すべてのクリスチャンは、世の終わりが近づいていることを示唆するあらゆる兆候を喜んで受け止めるべきである。サタンの世界が終わりを告げたことを悟ったとき、全人類は喜びに沸くだろう。なぜなら、その時こそ、彼らは新しい世界の市民となる機会を得るからである——それは、人間が築き上げた別の文明ではなく、権威と法がキリストの御国のものとなる新しい秩序なのである。

今まさに終わりを迎えつつあるこの世界は、その存続に最も熱心に尽力してきた人々でさえ、決して完全に満足できるものではなかった。確かに、そこには多くの善があったが、罪と悪が優勢であった。病

気、苦痛、そして

死は、すべての人にとって恐ろしい遺産となってきた。憎しみと戦争は、人々の幸福を台無しにし、国家の平和を破壊してきた。

この世でも来世でも、さらに悪いことが起こるのではないかという恐れが、男女から、そうでなければ少なくとも一時的には得られるはずだった喜びを奪う一因となってきました。まことに、聖書が宣言している通り、これは邪悪な世界であり、その特徴を深く探求すれば探求するほど、イエスがサタンをこの世の支配者であると宣言された際、その言葉の真意を十分に理解されていたことがよく分かります。

そのような世界が終わりを迎えようとしていること、そして聖書が告げているように、その支配者が縛られ、最終的に滅ぼされることになることを、私たちは皆、喜ぶことができます。イエスは、この時代に生き、御言葉に信仰を持つ者たちは、ご自身が予告された出来事が起こるのを見たとき、希望と喜びをもって頭を上げよ、と語られました。なぜなら、彼ら自身と人類が罪と死から解放される時が近づいているからです。

敵の滅亡

使徒パウロによって与えられた、キリストの王国に関する靈感に満ちた預言の中で、彼は、すべての敵がキリストの足の下に置かれるまで、キリストは統治し続けなければならないと宣言しており、最後に

滅ぼされる敵は死であると述べています（コリントの信徒への手紙一 15:24-26）。

これは、キリストの統治の目的の一つが、敵——すなわち、神の敵、人間の敵、そして義の敵——を滅ぼすことにあることを示している。死はキリストの統治によって根絶される敵の中で最後のものであるが、それ以前に他の敵は滅ぼされることになり、その中でも真っ先に滅ぼされるのは、キリストの正義と義による統治の

な妨げとなっている、この世の利己的で罪深い制度である。

これらを滅ぼすことは、それらによって束縛されてきた人々にとって、一時的な苦難と苦痛を意味する。預言者ダニエル書が「国が立ってから今に至るまで、かつてなかったような苦難の時代」と述べたのは、まさにこのことである。ダニエル書12章1節

詩編第2篇の預言において、イエスは、神が統治するために任命された「地の大いなる王」として言及されています。イエスが力と栄光をもって統治を始める前に、世界の諸国は「世の初めから今に至るまで」かつてないような「苦難」の時代を経験することになると預言されていました。

（マタイによる福音書24:21）。この予言された秩序の破綻に伴う大惨事に関連して、過去1世紀余りの間に、私たちはヨーロッパの多くの世襲王朝の崩壊と、それに続く世界情勢の混乱を目の当たりにしてきました。これらの出来事についてイエスご自身が預言された際、御自身の到来によって地上のすべての

部族が嘆き悲しむと宣言されましたが、今日、私たちは世界中のあらゆる国々でこの嘆きを見ることができます。

しかし、この苦難が一時的なものに過ぎないことを、私たちは神に感謝することができます。キリストの再臨は、滅びゆく世界に平和と喜びと命をもたらすために定められたものであり——そして、それが究極的な結果となるでしょう。しかし、これを成し遂げるためには、新たな統治体制が確立されなければなりません。そのためには、サタンが人知れず、そして多くの場合、その存在すら認識されない「君主」として君臨してきた既存の統治体制を打倒する必要があります。

もし、現代の文化

や教育のあらゆる恩恵を享受している世界の指導者たちが、なぜ世界を破滅へと向かう急降下から救い出せなかったのかと疑問に思ったことがあるなら、その答えは聖書の預言の中にあります。その答えとは、新しい秩序の確立に備えて、神聖な影響力が人間の事柄に介入しているということです。それは、神聖なるキリストの见えない臨在を通じて徐々に発揮されている影響力なのです。

罪と利己主義の制度——抑圧と戦争を助長してきたそれらの制度——の打倒は、神聖なるキリストの働きの始まりに過ぎません。それは、瀕死の患者の命を救うために用いられる外科医のメスのようなものです。

およそ六千年にわたり、人類は死にかけてきた。人間自身は、すべての人に死をもたらしている罪の毒針に対する治療法を見出すことができなかった。今や、偉大なる医師であるキリストが、このすべてを変えるために来られた。そして、まず必要な措置は、患者である人類を新しい環境へと移し、公正で義になかった法の下に置くことである。世界中の至る所で人間の権威が崩壊しているのは、まさにこの準備のためである。

終わりの日において

今、地上で起きていることの真の意味を知っているのは、信仰によって神の御言葉の証しを受け入れる準備ができている人々だけです。彼らにとって、聖書の預言は、人類がこれまでに経験した中で最も暗いこの時代にもかかわらず、輝かしい新しい日がまもなく夜明けしようとしていることを告げる灯台のようなものです。

それは、新しい王であるキリストの
な御臨在から、健康、喜び、平和、そして命の祝福が放射される日となるでしょう。キリストは、「義の太陽」と預言的に形容され、「その翼に癒やしを携えて昇る」という、栄光に満ちた神聖な統治者なのです。マラキ書4章2節

しかし、やがて——そしてそう遠くない将来に、と私たちは信じている——全人類は、人間の事柄において、人間によって構成された政府の力を凌駕する力が働いていることに気づき始めるだろう。これは

、人間同士の間に恒久的な平和と安全を再確立しようとする人間の努力が、絶えず失敗に終わることで明らかになるだろう。

今日の世界の支配者たちは、依然として自分たちが人類の運命の主人であり、自らの知恵と軍隊の圧倒的な力によって諸国に平和を強いることができると想像している。神による平和の確立の方法は、依然として世の賢者たちから軽蔑されている。しかし、彼らのあらゆる努力が失敗に終わり続けるにつれて、彼らは次第に、より高い権威に助けを求めるようになるだろう。

私たちが生きているこの重大な時代において、まだ未来の出来事であるこの事態について、預言者ミカは次のように述べている。「終わりの日には、主の家の山が諸山の頂に確立され、丘々よりも高く掲げられる。そして、人々はそこへ押し寄せる。

そして、多くの国々が来て、こう言うだろう。『さあ、主の山、ヤコブの神の宮へ上ろう。主は私たちに御自分の道を教え、私たちは主の道に歩む。律法はシオンから、主の言葉はエルサレムから発せられるからだ。

主は多くの民の間で裁きを行い、遠く離れた強大な国々を懲らしめられる。彼らは剣を鋤に、槍を剪定鎌に変える。国は国に対して剣を振るわず、もはや戦いを学ぶこともない。人々は皆、自分のぶどうの木の下、いちじくの木の下に座り、彼らを恐れる者はいない。万軍の主の口がそう告げられたからである。』ミカ書 4:1-4

恐怖に満ちた世界への希望

これは非常に包括的で心強い預言であり、現在の情勢に照らせば、まもなく成就し、全人類に永遠の喜びをもたらすであろう。まず、時期の特定に注目してほしい。「終わりの日に、こうなる。」

この「終わりの日」という預言的な表現は、伝統的な「破滅」の概念を指すものでも、この地球の破壊を指すものでも、また地球上における人類の存続の終わりを指すものでもありません。それは、サタンによる人々への支配の終わりの日、罪と死の終わりの日、戦争の終わりの日、そしてエデンの時代から現在に至るまで人類を苦しめてきたあらゆる悪の終わりの日を指しているのです。

現代

私たちは今まさに、この預言的な「終わりの日」の時代に生きており、すでに多くの国々を苦しめてきた悪のいくつかが減びるのを目の当たりにしてきました。神の名のもとに民を圧迫してきたヨーロッパの世襲支配王朝は、すでにその幕を閉じました。そして、この終わりの日に神の御計画が進むにつれて、私たちは最終的に、共産主義であれ、ファシズムであれ、あるいはその他の形態であれ、全体主義的独裁体制の終焉を目撃することになるでしょう。また、戦争の終焉、そして今、人々の心を満たしている、心を蝕むような恐怖の終焉も目撃することになるでしょう。

確かに、預言で予告されている「終わりの日」は、生きるにふさわしい栄光に満ちた時代であり、まも

なく、預言者が告げた通り、主の家の山が諸山の頂に確立され、人々がそこへ押し寄せるようになるでしょう。主の山とは、主の御国です。

ダニエル書の第二章において、地上における人間の支配を、華麗で人間のような像によって象徴的に描き、この支配の終わりを、その像の破壊によって表しています。破壊の道具は石として示されており、その石は最終的に成長し、やがて全地を満たす大きな山となります。この驚くべき預言の解釈において、ダニエルは、全地を満たすこの山こそが神の王国であると教えています。

預言者ミカは、この山、すなわち主の王国を、「主の家の山」として描写しています。この主の家とは、聖書が神の「御自身の息子たちの家族」と定めている者たちによって構成される、神の統治の家です。イエスはその筆頭であり、イエスと共に、イエスと共に苦しみ、死ぬという招きを受け入れた者たちがいます。彼らには、イエスと共に生き、共に統治するという約束が与えられています。

使徒パウロはこの点について、主の弟子たちを次のように励ましています。「御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子であることを証ししてください。もし子であるなら、相続人でもあります。神の相続人であり、キリストと共同の相続人です。ですから、もし私たちがキリストと共に苦しむなら、共に栄光にもあずかるのです。」ローマ人への手紙 8:16,17

恐怖に満ちた世界への希望

奇跡を行う神の力が、この新しい統治の成功を保証しています。サタンは、平和の君であり王の王であるイエスを殺したと思い込んでいましたが、神の力はイエスを死からよみがえらせました。イエスと共に苦しみ、死んだ者たちは、ヨハネの黙示録が「最初の復活」と呼ぶものによって死からよみがえらせられ、キリストと共に生き、支配することになります。ヨハネの黙示録20:6

キリストの王国の勝利に満ちた統治を描写する預言の中で、イザヤは「万軍の主の熱意がこれを成し遂げる」と告げています（イザヤ書9:7）。神の力がすでに「王の王」を死からよみがえらせ、その神の力が同様に、キリストと共に統治する者たちを生き返らせるために用いられることを考えれば、主がキリストを通してすべての良き約束を成就させる能力を疑うことができるでしょうか。決してそうではありません！

山々の頂上で

そこで、約束された事柄についてさらに注目してみましょう。預言者ミカは、この神の統治の家系が山々、すなわち諸王国の頂上に確立されると宣言しています。つまり、それはすべての国々の情勢において支配的な地位を占めることになるのです。なぜなら、イザヤ書が述べているように、「その統治と平和の増し加わりには終わりが無い」からです。イザヤ9:7

「そして、人々はそこへ押し寄せる」と、ミカの預言は続きます。これまでの人間の経験では、帝国主義的な政府が他国への影響力を拡大しようとするのと、多くの人々が避難を求めて他国へ逃れていました。しかし、キリストの王国の場合、そうはなりません。人々がその
な拡大する力を知るにつれて、預言者が宣言するように、人々はそこへ押し寄せるようになるでしょう。
。

この同じ趣旨についてさらに詳しく述べ、預言は次のように続きます。「多くの国々が来て、『さあ、主の山に登ろう……主は御自身の道を私たちに教え、私たちは主の道に従って歩む』と言うでしょう。」

この預言の部分が成就する頃には、諸国は自分たちの道の無益さと愚かさを悟っているでしょう。世界を混沌と破滅から救おうとするあらゆる努力が失敗に終わっていたため、彼らはその時、解決策をもたらすことのできる唯一の方、すなわちキリストに目を向ける準備が整っているでしょう。その頃には、キリストは地上の正当な王として認められているはずです。

諸国が主の道を学び、それを実践する意志を持ったとき、どのような結果がもたらされるのでしょうか。それは最も喜ばしい結果となるでしょう。なぜなら、預言は、彼らが剣を鋤に、槍を鎌に変え、もはや戦いを学ばなくなる、と宣言しているからです。

恐怖に満ちた世界への希望

人間の知恵は常に、平和を維持する唯一の方法は戦争に備えることだと主張してきましたが、この順序は地の新しい王によって逆転されるでしょう。なぜなら、諸国が王国の律法の聖なる影響下に入るにつれて、かつては戦争の糧として流用されていた地の資源が、人々に生活必需品を供給するために使われるようになるからです。

もはや彼らは戦争を学ぶこともない！

このわずかな言葉が示唆する、人間の世界観と経験における広範な変化を想像してみしてほしい！

これらは、平時の徴兵制も戦時の動員も廃止する。
すべての国の

な母親たちに、息子たちを戦争で命を落とすために育てる必要はないと保証する。あらゆる醜い形態の軍国主義を根絶する。人々の心から恐怖を取り除く。なぜなら、国々がもはや戦争を学ばなくなれば、戦争に巻き込まれることもない、と誰もが理解するからだ。教育課程から戦争の戦略を排除した教育プログラムがあることを、神に感謝しよう！

ぶどうの木といちじくの木の下で

人々は平和と正義の道を学び、実践するようになるため、経済的な安定を得ることになる。

この確信は、「すべての人が自分のぶどうの木といちじくの木の下に座る」という美しい情景の中に示されています。これは、キリストの御国の統治の下では、地球の資源がすべての人に利用可能となり、それらの資源を分かち合うすべての人の権利が、神

の御国の法によって保証されるということを、別の言葉で表しているに過ぎません。これが真実となるからこそ、預言はさらにこう付け加えています。「そして、だれも彼らを恐れさせない。」恐怖から解放されるというこの確信を、神に感謝します。

誰も彼らを怖がらせることはできない！今日、侵略への恐怖はすべての人々の心を苛んでいるが、この恐怖は国家による侵略の可能性や脅威にとどまらない。

経済的侵略と、それに伴う法外な価格の引き上げは、大衆に同様に深刻な痛みをもたらしている。このように、さまざまな側面における人間による人間への非人道的な行為によって生み出された恐怖は、すべての人間の権利である平和と喜びの遺産を破壊し続けている。そのすべての人間は、神のかたちに造られた最初の両親の子孫である。キリストの王国の法の下では、その権利は回復されるだろう。なぜなら、その時には、もはや誰も彼らを恐れさせる者はいないからである。

死の滅び

ミカ書の預言は美しく、心強いものですが、キリストの統治下における人類の運命に関する神の完全な計画を示しているわけではありません。戦争も戦争への恐れもない世界は、今まさに終わりを迎えようとしているこの世界よりも、はるかに優れた世界となるでしょう。

さらに、すべての人にとって経済的な安定が確実な

恐怖に満ちた世界への希望

ものとなれば、それは哲学者たちが夢見てきたものの、決して実現できなかったような世界となるでしょう。しかし、それでもなお、悲しみや苦痛、そして死に加え、他の恐れは残るでしょう。

死への恐れは依然として残るでしょうし、暗黒時代のグロテスクな教えのせいで、死の向こう側にあるものへの恐れも生じるでしょう。病院や医師、葬儀屋への需要も依然として存在するでしょう。しかし、病気や死、そしてそれらに伴うあらゆる悪さえも、キリストの御支配によって滅ぼされることを私たちに保証してくれる、神の御言葉の他の約束があることを神に感謝します。

私たちはすでに、神の御国において死が滅ぼされるというパウロの確約について触れました。さて、イザヤ書25章6～9節の預言に注目してください。この預言では、ミカ書の預言と同様に、主の御国は山によって象徴されており、この山において死は勝利の中に飲み込まれ、「主なる神はすべての顔から涙をぬぐい去ってくださる……

そして、その日、『これは私たちの神である。私たちは彼を待ち望んでいた……私たちは喜び、その救いを喜ぶ』と言われるだろう」と預言者は続けます

。

この滅びゆく人類に対する救いの希望について、新約聖書の使徒ペテロも言及している。ペテロの預言において、彼はキリストの再臨の目的について語り、それが「世の初めから、神がすべての聖なる預言

者たちの口を通して語ってこられた、万物の回復の時」をもたらすものであると述べている。

（使徒言行録3:20,21）。再臨が、地球を含むすべてのものの破壊をもたらすのではなく、むしろ万物の回復、すなわち元通りの状態への回復をもたらすという知らせに、私たちは心から喜んでいる。これは、生きている者にとっては健康の回復を、死んだ者にとっては復活を意味する。

キリストの再臨は、すでに、正義と愛に基づくキリストの統治に備えて、この現在の邪悪な秩序の破壊をもたらしつつあります。しかし、これは単に人間の利己的な制度の破壊に過ぎません。生者も死者も、もし神の律法に従うならば、罪によって失われたものへと回復されるのです。

人間が失ったのは天の住まいではなく、地上の住まいでした。地は人間のために造られ、人間が創造されたとき、地を治める権威が与えられました。しかし、この支配権、そして人間の命までもが、罪によって失われてしまいました。この失われた楽園は回復されることになっており、使徒ペテロが「万物の回復の時」と表現しているのは、まさにこの回復の業なのです。

ペテロは、この神の壮大な御計画が、世の初めから神の聖なる預言者たちによって予告されていたと宣言しており、その預言的証言の一例が、アブラハムへの神の約束である。

恐怖に満ちた世界への希望

キリストの王国の

な統治の下で人々に訪れる回復の祝福を描写する、こうした預言的な言葉のもう一つは、すでに引用されたもの——すなわち、死が勝利に飲み込まれ、主なる神がすべての人の顔から涙をぬぐい去ってくださるという、その祝福に満ちた約束です。

それによって人間の経験がどれほど一変するかを考えてみてください。神は、人々の悲しみの原因を取り除くことによって、その涙をぬぐい去ってくださいます。そして、今日の世界にはどれほど多くの悲しみの原因があるか、そしてそれらが取り除かれることが全人類にとってどのような意味を持つかを考えてみてください！

すべての国々の望み

神の預言者の一人は、回復の時代について述べる中で、「すべての国々の願いが実現する」と宣言しました。（ハガイ書

2:7）。すべての国々は平和を望み、侵略からの安全を望み、自国民の繁栄を望んでいます。そして預言者ダビデは、この地の新しい王であるキリスト・イエスについて、「彼は民の貧しい者を裁き、困窮する者の子らを救い、圧制者を打ち砕く」と宣言しています。詩編 72:4

別の回復の約束において、イザヤ書は、そのとき——すなわち、キリストとその教会の治世の間に——「足の不自由な者は鹿のように跳ね回り、口のきけない者の舌は歌う」と宣言しています。また彼は、

「盲人の目が開かれ、耳の聞こえない者の耳が開かれる」とも述べています。（イザヤ書

35:5,6）。これは間違いなく、神の御業に対して目も耳も閉ざされている人々を指しています。そのような人々は数百万にも上ります。なぜなら、使徒パウロは、この悪の世の神、すなわちサタンである悪魔が、信じない者たちの目をすべて盲目にし、それによって彼らが愛に満ちた真の神を知り、愛し、賛美することを妨げていると教えているからです。コリントの信徒への手紙二 4:4

神の預言者の一人は、回復による祝福をさらに別の角度から説明し、キリストの千年の統治について、「そのとき、主の栄光の知識が、海を水が覆うように、全地を満たすであろう」（ハバクク書 2:14）と述べています。

人々はもはや、さまざまな神々を崇拝したり、対立する宗教的信念を支持したりすることはなくなるでしょう。この点について、別の預言は、神が「民に純粋な言葉〔あるいはメッセージ〕を授ける」と宣言しており、人々は「主の御名を呼び求め、心を一つにして主に仕える」ようになるとしています（ゼファニヤ書

3:9）。そうすれば、人々は心を尽くし、真の理解をもって、愛に満ちた真の神を自由に礼拝し、仕えることができるようになるでしょう。

『ヨハネの黙示録』には、キリストの統治の時代に人々に与えられる祝福についての、もう一つの素晴

恐怖に満ちた世界への希望

らしい約束が記されています。そこには、「神は彼らの目からあらゆる涙をぬぐい去られる。もはや死も、悲しみも、泣き叫ぶ声も、痛みも、もはやない。以前のものはすべて過ぎ去ったからである」と宣言されています。（黙示録 21:4）

死のない世界を想像するのは難しいですが、神はそうなることを約束されており、私たちはそれを信じ、勇気を得ています。もしそのような約束が、神よりも力のない者によってなされたのであれば、疑うのも無理はありません。しかし、創造主は命の源であるゆえに、そのような約束を果たすことができます。「私たちは、彼の中にあって生き、動き、存在しているのです」と使徒言行録17:28で使徒パウロは宣言しました。

何が私たちを生かし、何が私たちの動く力を与えているのか、私たちには理解できません。しかし、神はそれを知っておられ、キリストの御国の律法に従うすべての人に、永遠の命を与えることに十分に力をお持ちです。そして、まさにそれを実現すると神は約束されたのです。キリストが再臨し、御国を確立されるのは、この目的のためなのです。

しかし、聖書は、その時の好条件の下で、信じたり従ったりすることを拒む者は、ペテロが言うように、「民の中から滅ぼされる」と述べています（使徒言行録3:23）。永遠の命は、信仰と従順によってその資格を得た者にのみ与えられるのです。

希望のメッセージ

これこそが、苦難と恐怖に満ちた世界の人々に今、差し伸べられることのできる輝かしい希望である。それは輝かしい希望であり、これを宣べ伝えることは、預言者が「恐れる心を持つ者たちにこう告げよ。『強くあれ、恐れるな。見よ、あなたの神が報復をもって来られる。報いを与える神が来られ、あなたたちを救われる』」と記した言葉に従うことである。（イザヤ書35:4）

預言において、私たちの時代を指す名称の一つに「復讐の日」があります。それは、罪と抑圧に満ちた古くからの体制や制度が打倒される中で、神の義なる怒りが現されている時です。この現在の邪悪な世界が根こそぎにされることによって、人々は恐れや苦悩を経験することになりますが、神の究極の目的は、キリストの御国の確立を通じて、人々を罪と死から救うことにあります。

それゆえ、私たちは今日のこの恐怖に満ちた世界に向かって、「恐れるな」と告げることができるのです。

なぜなら、人間の事柄への神の介入がまもなく、地上のすべての家族に平和と健康と命、そして永遠の救いの機会をもたらすからです。